

石うす
挽きながら
背負われて聞いた歌

話してくれた人 島崎いささん(本市場新田)

昭和五十七年十一月五日号

曇らばくもれ箱根山……

「曇らばくもれ箱根山。晴れたとて、お江戸がヨウ見えるわけじゃない。さてはエー」

この歌の題はとんと知らんが、母親が石うすを挽きながら、よくうたっていた……。わたしやその母親の背中に負われて聞かされたもんだ」。

実家は岩本にあつて、母親も同じ村の出だから、ずっと昔からこの辺に伝わつて来た歌なんだらう」。



石うすで挽くものは、どこの家でもそばや小麦。米のご飯はめつたに食べられん。そばやうどん、それにすいとんをよく食べたもん

◀この楽符は富士市少年少女合唱団指揮者の辻村典枝さんに採符してもらいました。

くもらば - くもれ - はこね や - -
まはれ - - た - - とて おえど
が - - - よう みえる わ け - じゃ
な い さ て は え

だよ。

昔の子供はよく働いたヨ。朝は三時に起きて、桑の葉を採つてお蚕おごさんの世話をし、六時には田んぼへ行つた。百姓仕事も、今とはくらべものならんほど大変でな。とにかく体をこぎ使つた。その上、夜はよなべ仕事だ。男は縄をなつたり、女は針仕事、子供は年寄りの肩たたき。

その駄賃として月に五十銭もらうのが楽しみでなあ。はつはは……。

「曇らばくもれ箱根山……」

今ではうたう人もおらんようになったが、こうしてたまにうたうと、昔のことが思い出されてのう……。